

第6室 絵画—仏画 展示解説

今回の12幅の仏画は、もと仏画写経貼交屏風2隻に貼られていたものを改装したものである。

N3-1-1 聖徳太子および五臣像（しょうとくたいしおよびごしんぞう）

天蓋（てんがい）下の太子を、3人の僧侶と束帯姿の2人の人物が取り囲むように坐っている。各人物には短冊形が添えられているが、文字は不明。修理前、欠失部分には弘法大師像とみなされる他の絵から転用された絵絹が補絹として使われていた。

N3-1-2 阿弥陀来迎図（あみだらいごうず）

画面左上から阿弥陀如来と三体の菩薩が飛雲にのって、画面外にいると思われる極楽浄土に旅立とうとしている臨終の人を、お迎えに舞い降りてくる場面を表したもの。構図や阿弥陀如来の姿勢、如来や菩薩の体を白く塗る点など、来迎図が定型化する以前の古様な要素がみられるのが特徴的である。

N3-1-3 釈迦三尊十六羅漢図（しゃかさんぞんじゅうろくらかんず）

蓮華座（れんげざ）に、頭光（ずこう）をともなった釈迦が、足を組んで坐り、左右には普賢（ふげん）菩薩と文殊（もんじゅ）菩薩、さらには十六羅漢が囲んでいる。釈迦の袈裟などには、金箔を細く裁断した截金（きりかね）で麻葉繫（あさはのつなぎ）や卍繫（まんじつなぎ）などの文様が非常に細かく表わされている。

N3-1-4, 3-2-1 不動明王二童子像（ふどうみょうおうにどうじぞう）

海上の岩座に荒々しい形相の不動明王が、その変化身である矜羯羅（こんがら）童子と制吒迦（せいたか）童子を従えている。不動明王の光背は、上方で激しく渦巻く火焰（かえん）が特徴的である。

N3-1-5 釈迦三尊像（しゃかさんぞんぞう）

獅子をともなった六角台座に、頭光（ずこう）と身光（しんこう）を背負った釈迦が、蓮華座に足を組んで坐り、前面向かって左には知恵をつかさどる文殊（もんじゅ）菩薩、右には修行などをつかさどる普賢（ふげん）菩薩を表わす。釈迦および二菩薩の着衣の文様や蓮華の花弁の脈には、金泥や金箔を細く裁断した截金（きりかね）が使われている。

N3-1-6 愛染明王像（あいぜんみょうおうぞう）

蓮の花の台座に足を組んで坐る赤肉身の愛染明王で、3つの目に、6本の手のそれぞれに持物を持った三目六臂（さんもくろっぴ）の怒りの荒々しい形相で表わされる。下方には蓮華座にのる火焰宝珠（かえんほうじゅ）などの七宝が散りばめられている。

※裏面に続く

N3-2-2 弥勒菩薩像（みろくぼさつぞう）

頭光（ずこう）と身光（しんこう）を背負い、蓮の花の台座に左足を踏み下げて坐る弥勒菩薩像を表わす。色鮮やかで生々しい彩色などから、制作年代はかなり降り、江戸時代幕末の基準作例に近い作風が感じられる。

N3-2-3 文殊菩薩像（もんじゅぼさつぞう）

正面を向き、大きな口を開けたいかめしい獅子に乗る文殊菩薩を表わす。子供のような顔をした童子形（どうじぎょう）の文殊菩薩は、頭光（ずこう）を負い、蓮の台座に乗った形で表わされる。彩色とともに金泥や銀泥、金箔を細く裁断した截金（きりかね）などが用いられている。

N3-2-4 千手観音二十八部衆像（せんじゅかんのんにじゅうはちぶしゅうぞう）

千本の腕を持って人々を救うといわれる岩上の千手観音を中心に、左右に各 13 体の眷属が従い、さらに画面向かって上方右に雷神、左には風神が飛来する。観音の手数は、中央で合掌する手も含めると、四十二手を数える。彩色も比較的よく残っている。なお、修理に際し、旧裏打紙に二十八部衆の尊名を墨書した短冊が確認された。

N3-2-5 阿弥陀三尊来迎図（あみださんぞんらいごうず）

阿弥陀如来および観音・勢至（せいし）菩薩が雲に乗って来迎する場面を表わす。如来の肉身や衣などは金泥で塗られ、頭光は金箔を細く裁断した截金（きりかね）線に金泥で暈しを添えており、当初の華やかさがしのばれる。

N3-2-6 釈迦如来像（しゃかによらいぞう）

蓮の花の台座に足を組んで坐る釈迦如来を表わす。釈迦は頭光と身光を負い、身にまとう袈裟は朱色の地に金泥で雷文繫（らいもんつなぎ）を、蓮華座の輪郭と葉脈には、金箔を裁断した太く粗い截金（きりかね）を用いる。六角形の台座にも、ぼかしの纒縹彩色（うんげんさいしき）や金泥が随所に残っている。

第6室 染織—色彩ゆたかな古代の幡足—

染織は「綾襷継分袷幡残欠」を中心に置き、綾でつくられた幡足（幡の下方に垂れ下がった吹流しの部分）を一堂に展示する。綾とは規則的に織り糸を浮かせることで文様を表わした織物。日本では古墳時代から織られはじめた。当初は菱文や山形文など、幾何学的な文様のみであったが、飛鳥から奈良時代にかけて具象的な文様も表わせるようになった。様々な文様を織り出した幡足の作例を通じ、飛鳥から奈良時代にかけて花開いた染織美術の世界を概観したい。

N-319-22：綾襷継分袷幡残欠（あやたすきつぎわけあわせばん）

用いられている綾は、古い技法で織った小菱文や九つ菱文などの幾何学文様が中心だが、一部に進んだ技法の綾がみられ、雲の文様が表されている。

N-319-27-1：濃緑地大双竜唐草四弁花円文綾幡足残欠

（こいみどりじだいそうりゅうからくさしべんかえんもんあやばんぞくざんけつ）

大きな円文のなかに、胴をくねらせた勇ましい竜を向き合わせに配し、円文の外側には唐草文と小さな花文をめぐらす。

N-319-87-3：淡黄緑地山形文綾幡足残欠

（うすきみどりじやまがたもんあやばんそくざんけつ）

N-319-106：黄地山形文綾幡足残欠（きじやまがたもんあやばんぞくざんけつ）

山形を連続して表した山形文の綾。綾の技法の中でも古式な平地浮文綾（ひらじうきもんあや）や平地綾文綾（ひらじあやもんあや）が用いられている。

N-319-111：白茶地並び五菱入連珠円文綾幡足残欠

（しろちゃじならびいつつびしいりれんじゅえんもんあやばんそくざんけつ）

平地変り菱文綾（ひらじかわりあやもんあや）という技法で、連珠をめぐらした円文内に大小五つからなる縦長の菱文を並べている。

N-319-119：黄地入子菱繫文綾幡足残欠（きじいりこびしつなぎもんあやばんそくざんけつ）

古式な幾何学文様の綾で、平地浮文綾の技法が用いられている。

***裏面につづく**

様々な綾の幡足

綾は見る方向によって、文様がはっきり現れたり、沈んだりしますので、体勢をかえながらご覧頂ければと思います。

I-336-23：黄地変り鰐文綾幡足

(きじ かわりいしだたみもん あや ばんそく)

I-336-25：黄緑地山形文綾幡足

(きみどりじ やまがたもん あや ばんそく)

I-336-26：黄地花鳥入亀甲繫文綾幡足

(きじ かめ からはないり きっこうつなぎもん あや ばんそく)

I-336-27：赤地双鳳連珠唐草円文綾幡足

(あかじ そうほうれんじゅ からくさえんもん あや ばんそく)

I-336-29：濃黄緑地大双竜唐草四弁花円文綾幡足

(こいきみどりじ だいそうりゅう からくさ しべんか えんもん あや ばんそく)

I-336-33：白地葡萄唐草文綾幡足 (しろじ ぶどうからくさもん あや ばんそく)

I-336-36：黄地亀唐花亀甲繫文綾幡足

(きじ かめからはな きっこうつなぎもん あや ばんそく)

I-336-38：赤地双鳥連珠円文綾 (あかじ そうちょう れんじゅえんもん あや)

I-336-40：紺地双鳥連珠円文綾幡足 (こんじ そうちょう れんじゅえんもん あや ばんそく)

I-336-43：黄緑地山形文綾幡足 (きみどりじ やまがたもん あや ばんそく)

I-336-49：赤地鰐文綾幡足 (あかじ いしだたみもん あや ばんそく)